英語生かした職業に

米グロスター市ホームステイ 中高生5人報告

市役所

市の姉妹都市・米国グロスター市へのホームステイ事業に参加した中高生の報告会が27日、市役所であった。生徒5人が現地の人と交流した思い出や生活文化の違いに対する驚きなど10日余りの貴重な体験を振り返った。

参加したのは山田中2年植田怜文葵さん(14)と秦悠笑さん(13)、荘内中2年森本正晃さん(14)、倉敷天城高1年堀内梨紗さん(16)、玉野高2年五老海千紘さん(16)。7月24日に出発し、現地ではホストファミリー宅に滞在。グロスター市長を表敬訪問し、英語研修しながら近隣のボストン市内の観光などに取り組んだ。今月5日に帰国した。

5人は「英語がうまく話せなくても思いが伝わった」「食事の量が多くて食べるのが大変だった」「道路では歩行者が横断しようとすると車が止まって待ち、交通マナーが優れていた」などと発表。

「英語力が足りないと感じたのでもっと勉強する」「将来は英語を生かした職業に就きたい」と将来の目標を語る生徒もいた。

黒田晋市長、市議、教育委員ら約20人が聞いた。石川雅史教育長は「国際交流の経験を次に生かすことが大切。外国人を案内するスチューデントガイドに積極的に参加するなど英語の勉強に継続して取り組んでほしい」と話した。

ホームステイ事業は中高生の国際感覚の養成や語学力の向上を目的に1996年に始めた。(内田貴大)

報告会でホームステイの体験を振り返る（左から）植田さん、堀内さん、五老海さん、秦さん、森本さん

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2019年8月29日 山陽新聞朝刊 24ページ